

## マルクスの「価値尺度」論について

——宇野弘蔵氏のマルクス批判を手掛りに——

松 田 清

### 目 次

はしがき

〔Ⅰ〕 マルクスの「価値尺度」規定

〔Ⅱ〕 宇野弘蔵氏のマルクス批判

〔Ⅲ〕 マルクス「価値尺度」論の方法

むすび

### は し が き

価値尺度論はマルクス貨幣理論の大宗をなすものであるが、周知のようにその理解は、今日なお区々として定まらない有様である<sup>1)</sup>。それというのも、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定からすれば、価格は必ず価値どおりでなければならないからにはかならない。たとい単純流通を想定しようとも、それだけで価格は常に価値どおりであるとして済ませるわけにはいかないのであって、そのためにマルクスの規定はいかにも不合理なものに見えざるをえないのである。

その点に逸早く着目されたのは、周知のように宇野弘蔵氏であった。氏はつとにこう指摘されていたのである。すなわち、マルクスも言っているように「価格と価値量との量的な不一致の可能性、または価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにある」ので

1) 価値尺度論研究の現状(と論争史)については、さしあたり、最新のものとして、正木八郎「価値尺度機能に関する論争」(種瀬茂他編『資本論体系 2』有斐閣、1984年、所収)を参照されたい。

あり、「このことは、けっしてこの形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、すなわちそこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである」<sup>2)</sup>が、「この点は、マルクスのように貨幣の価値尺度としての機能をも、単なる貨幣形態として、価格を価値どおりに表示するものとしていては、解明されない。」<sup>3)</sup>と。

しかし、貨幣の価値尺度機能を論じているそのまさに同じ節(『資本論』第1部第3章第1節)の中でマルクス自身が上のように言っているのであってみれば、「この点」が貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定では「解明されない」などということは、そう俄に信じられることではない。そこで私は以下において、宇野氏のマルクス批判をもう少し詳しく確かめながら、マルクスの「価値尺度」論をいっそう明確に理解するための手掛りを探ってみることにしたいと思う。

2) Vgl. Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, 1. Band, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, 23. Band, S. 117. カール・マルクス『資本論』第1巻、『マルクス・エンゲルス全集』第23巻所収(岡崎次郎訳), 137-138ページ参照。以下『資本論』から引用する場合には、各巻を K. I, K. III と表示し、*Werke* 版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する(訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎氏の訳による)。

3) 『宇野弘蔵著作集』第4巻、岩波書店、1973年、57ページ。

## 〔I〕マルクスの「価値尺度」規定

まず、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定を確認することから始めよう。

周知のように、マルクスは『資本論』第1部第3章の第1節を「価値の尺度」と題し、その冒頭で次のように述べている。

「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、または、諸商品価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較の可能な大きさとして表わすことにある。こうして、金は諸価値の一般的尺度として機能し、ただこの機能によってのみ、金という独自の等価物商品はまず貨幣になるのである。

諸商品は、貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自身として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の一品で共に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の一品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度の、すなわち労働時間の、必然的な現象形態である。」(K.I, S. 109.)

従来、この文章の前段部分がよく引用され、マルクスの言う貨幣の価値尺度機能とは「価値表現の材料」となることだ、と解されるのが通例である。もちろん、マルクスは「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること」にあると明確に述べているのであるから、マルクスの言う貨幣の価値尺度機能とは価値表現の材料になることだ、と解すること自体は全く正当なことである。しかし、だからといって、マルクスがすぐ続けて、「金は諸価値の一般的尺度として機能」する、と述べている点を無視してよいわけではない。と言うのも、

もし貨幣の価値尺度機能が価値表現の材料になることだけにあるならば、何もわざわざ“諸価値の一般的尺度として機能する”などと、徒に人を惑わすような言い換えをする必要はないからである。「もちろん、ある言葉をどういう意味に使うかは、ある程度までは使う人の勝手といえるが、それにもおのずから限度がある。」<sup>4)</sup>当然のことにマルクスもこの「限度」を弁えていたはずであって、何の気なしに「尺度」という言葉を用いたわけではないはずなのである。では、いったいマルクスは、「尺度」という言葉をどういう意味に用いているのであろうか？

マルクスの用語法がいちばん明瞭なのは、上の引用文の末尾で彼が「諸商品の内在的な価値尺度の、すなわち労働時間の」と述べている場合であろう。この点については、彼はすでに第1章第1節において次のように論じていたのである。「では、それ『ある使用価値または財貨』の価値の大きさはどのようにして計られるのか？ それに含まれている『価値を形成する実体』の量、すなわち労働の量によってである。労働の量そのものは、労働の継続時間で計られ、労働時間はまた1時間とか1日とかというような一定の時間部分をその度量標準としている。」(K.I, S. 53. [ ]内引用者)と。明らかに、マルクスが「内在的価値尺度」と言っている場合の価値尺度とは、文字どおり“価値の大きさを計るための尺度”という意味なのである<sup>5)</sup>。

マルクスが“諸価値の一般的尺度として機能する”と言っている場合も決して例外ではないのであって、“諸価値の一般的尺度”とは“価値の大きさを計るための一般的尺度”の謂にほかならない。現に彼は先の引用文の後段部分に

4) 久留間敏造『貨幣論』大月書店、1979年、225ページ。もっとも、久留間氏自身は、宇野弘蔵氏の用語法を批判してこう言っておられる。

5) 「われわれは価値の大きさの尺度を知っている。それは労働時間である。」(岡崎次郎訳『資本論第1巻初版』大月書店、1970年、29ページ。傍点—マルクス)

において、「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計る」「ことによって」「この独自の商品をも自分たちの共通な価値尺度」「に転化させる」、と述べているのである。

このようにマルクスは「尺度」という言葉を至極普通の意味で用いているわけであるが、考えてみればこれは全く当然のことではなければならない。なぜなら、元来「価値形態は、ただ価値一般だけではなく、量的に規定された価値すなわち価値量をも表現しなければならない」(K. I, S. 67) のであるが、「量の表現」というものが一般にそうであるように、価値量も何かを尺度として計られることなしにはもともと表現さるべくもない<sup>6)</sup> からである。そして、長さを計るためには何かの長さを尺度としなければならず、重さを計るためには何かの重さを尺度としなければならないのと同じように、価値量を計るためには何かの価値量を尺度としなければならないこと、言を待たない<sup>7)</sup>。金が「諸価値の一般的尺度」とされ、諸商品の価値量が金の価値量を尺度として計られるからこそ、諸商品の価値量は応分の金量を以て表現されるのである。

だからこそマルクスは貨幣の価値尺度機能を

言わば二重に規定しているのであって、彼の言う貨幣の価値尺度機能とは、諸商品の価値を計るための尺度となることによって、諸商品の価値を表現するための材料となる、ということなのである。しかもこの場合、「諸商品の価値を計るための尺度となる」という規定を仮に「第1規定」と呼ぶことにし、「諸商品の価値を表現するための材料となる」という規定を「第2規定」と呼ぶことにすれば、「第1規定」の方がより根源的な規定であることは明らかであろう<sup>8)</sup>。事実マルクス自身、『経済学批判』では次のように述べているのである。

「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい大きさの労働時間をふくんでいる割合におうじて測るから、金は価値の尺度となる。そして金が一般的等価物すなわち貨幣となるのは、さしあたっては、ただ価値の尺度としてのこの規定性によってだけであって、価値の尺度としての金自体の価値は、直接に商品等価物の範囲全体で測られるのである。他方では、いまやすべての商品の交換価値は、金で表現される。」<sup>9)</sup>

だが、マルクスの「第1規定」からすれば価格は価値どおりであるほかないことになるが、

6) 「価値の外的尺度はすでに価値の存在を想定している。たとえば金が綿花の価値を計ることができるのは、ただ、金と綿花とが価値としてその両方とは違った単位をもっている場合だけである。」(Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert* (Vierter Band des "Kapitals"), in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 26, 3. Teil, S. 162.

カール・マルクス『剰余価値学説史Ⅲ』、『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第3分冊所収(時永淑・岡崎次郎訳), 212ページ。傍点=マルクス。

7) もっとも、「諸商品の内在的な価値尺度」は労働時間なのであって、価値量は、その実体をなす労働の量としては、時間を尺度として計られ、時間によって表現される。しかし、商品の「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにか現われえない」(K. I, S. 62) のであるから、「内在的な価値尺度」も自ずから貨幣としての金の価値量という現象形態をとるほかないのである。

8) 三宅義夫氏は、「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」(同氏稿「貨幣の諸機能」《遊部久蔵他編『資本論講座 1』青木書店, 1963年, 所収, 237ページ)と述べられて、「第1規定」を真向から否定されている。しかし、氏の所説については続稿で検討することにした。

9) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, S. 50. カール・マルクス『経済学批判』、『マルクス=エンゲルス全集』第13巻所収(杉本俊郎訳), 49ページ。傍点=マルクス。なお、マルクスは次のようにも述べている。「もし諸商品が全面的にその価値を銀または小麦または銅で測り、したがって銀価格、小麦価格または銅価格としてあらわすならば、銀、小麦、銅は価値の尺度となり、こうして一般的等価物となるであろう。」(ebenda, S. 51. 同前。傍点=引用者)と。

それではあまりに不合理ではないか？ 貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定は、皮肉(?)なこと、その明確さのゆえに却って種々の異論に出くわすことになるのである。

## 〔Ⅱ〕宇野弘蔵氏のマルクス批判

マルクスの「価値尺度」論に対して最初に異論を唱えられたのは、既述のように宇野弘蔵氏であったが、その際の問題意識を、氏は次のように披瀝されている。

「貨幣の価値尺度機能は、われわれが物指で長さをはかったり、秤で重さをはかったりするのとは異なって、商品の価値を価格として計量しつつ、その交換を媒介するということになるのであって、資本主義社会としてその完成を見る商品経済の、価値法則による自立的規制に特有なるものと、私は考えている。マルクスも、『価格と価値量との量的不一致の可能性、または価値量からの価格の乖離の可能性は、価格形態そのものの内にある』ことを指摘した後、続いて「このことは、決してこの形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、即ちそこでは規則がただ盲目的に作用する無規則性の平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである」(I 107頁。岩(→)195頁〈向坂訳、第1巻133頁〉)といっている。貨幣の価値尺度機能はこの規定に基づいて解明されるべきものと、思うのである。ところがマルクスもそうはしていない。私の疑問はその点にある。」<sup>10)</sup>

具体的な中味はともあれ、「貨幣の価値尺度機能は、……資本主義社会としてその完成を見る商品経済の、価値法則による自立的規制に特有なるものと」考えている点では、マルクスも同断であろう(だからこそ宇野氏も、すぐ続けて「マルクスも」と言われているのであろう)。だから問題は、宇野氏が「貨幣の価値尺度機能

はこの規定に基づいて解明されるべきものと、思うのである。ところがマルクスもそうはしていない。」と言われる場合の「この規定に基づいて」とはどういうことなのか、という点にある。氏の次のような指摘は、その点を明らかにしているものと見てよいであろう。

「マルクスは、……『価格と価値量との量的不一致の可能性、または価値量からの価格の乖離の可能性』は『この形態の欠陥ではない』ということを明らかにしているのであるが、しかしこの乖離が訂正される点を明確にしていない。私は、価格形態が価値量とのかかる不一致の可能性を示しただけでは、貨幣の価値尺度機能は明らかにされないと考え、その不一致の訂正される過程があってこそ、貨幣は価値尺度の機能を果たすものとなるというのである。」<sup>11)</sup>

ここで宇野氏は、①マルクスは価値量からの価格の「乖離が訂正される点を明確にしていない」、②「価格形態が価値量とのかかる不一致の可能性を示しただけでは、貨幣の価値尺度機能は明らかにされない」、③価値量と価格との「不一致の訂正される過程があってこそ、貨幣は価値尺度の機能を果たすものとなる」、という3点を指摘されているのであるが、まず②については全く氏の言われるとおりであって、全然異議はない(マルクスも別段、「価格形態が価値量とのかかる不一致の可能性を示しただけで」貨幣の価値尺度機能は明らかにされる、と主張しているわけではない)。また①の点については、それ自体としてはマルクス批判として意味があるとも思われない。おそらく宇野氏も③の点との関連で指摘されているのであろう。とすると、残るは③の点であって、要するに宇野氏は、価値量と価格との「不一致の訂正される過程があってこそ、貨幣は価値尺度の機能を果たすものとなる」(と、氏が考えておられる)にもかかわらず、マルクスはその点を「明確にしていない」、ということを問題にされている

10) 『宇野弘蔵著作集』(以下『著作集』と略記)第4巻、333ページ。

11) 同前、354ページ。

のである。先に宇野氏が「貨幣の価値尺度機能はこの規定に基づいて説明されるべきものと、思うのである。ところがマルクスもそうはしていない。」と言われていたことの意味もそこにあるのであって、貨幣の価値尺度機能は価値量と価格との「不一致の訂正される過程」に即して説明されるべきものである（と、氏が思っておられる）にもかかわらず、マルクスは「そうはしていない」、「私の疑問はその点にある」、ということにはほかならない。

そこで、宇野氏の問題とされるところをもう少し具体的に尋ねてみよう。すると、氏はこう言われている。「問題は、……簡単なことである。即ち貨幣による商品価値の表示がそのまま貨幣の価値尺度機能といえるか、どうかということである。」<sup>12)</sup> と。そして宇野氏自身は、この問題に対して次のような解答を与えられているのである。

「商品の価値は、われわれが常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもつて計量せられ得るものではない。物指にしてもあてて見なければ長さは測られないが、あてて見れば計量出来る。商品ではそういうふうに外部的には計量出来ない。商品が価格を与えられたからといって、それを直ちに価値を計量するものとする事は出来ない。物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである。その点で商品が貨幣形態をとることをもって直ちに貨幣が価値の尺度として機能するとはなし得ないのである。」<sup>13)</sup>

たしかに、宇野氏の言われる如く「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」ならば、「商品が価格を与えられ」、貨幣形態をとったからといって、まだ「交換されて見ること」がなされておらず、したがって「物指をあてて見るということ」がなされていないわけだから、「それを直ちに価値を計量するものとする事は出来ない」であ

ろうし、また、そのことをもって「直ちに貨幣が価値の尺度として機能するとはなし得ない」であろう。そうすると問題は、①「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」のかどうか、②「商品が価格を与えられ」、「商品が貨幣形態をとる」際、貨幣はいかなる働きをしているのか、ということになる<sup>14)</sup>。

「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」ならば、商品が貨幣と交換されれば「物指をあてて見るということ」がなされたことになり、商品の価値が計量され、貨幣が価値尺度として機能した、ということになるであろう。そこで宇野氏は言われる。「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する。」<sup>15)</sup> と。しかし、貨幣が「商品の価値を一定量の金価格として実現」したからといって、「それを直ちに価値を計量するものとする事」ができるであろうか？ 氏は言われる。「貨幣で購買されたとしても、それはなお価値を実現したとはいいい得ないものを残している。売手個人としては、その商品の価値を実現したと考えるにしても、そしてまた考えてもよいのであるが、客観的にはそうはいえない。価値以上に販売したことにもなれば、価値以下に販売したことにもなる。」<sup>16)</sup> と。さすれば、次

14) 宇野説に対しては、周知のように久留間鮫造氏がつとに詳細な批判を展開された（久留間、前掲書、後篇参照）。ただ、その際久留間氏は、宇野説を根本的に誤解されているように思われる。しかし、その点については続稿で触れることにしたい。なお、以下の文献参照。

小林威雄「価値尺度について」（『立教経済学研究』第25巻3号所収）

下平尾勲「貨幣と信用」新詳論、1974年、第2章 頭川博「価値尺度としての貨幣の概念」（『高知論叢』第9号所収）

佐羽菊治「価値尺度としての貨幣の機能について（2）」（都立商科短大『研究論叢』第27号所収）

15) 『著作集』第1巻、44ページ。傍点一引用者。

16) 同前、46—47ページ。

12) 『著作集』第4巻、336ページ。

13) 『著作集』第1巻、岩波書店、1973年、45ページ。

のように言われるほかない。「もちろん 価値から背離した価格を実現する貨幣を、それだけでただちに価値尺度の機能を果たしたとはいえない。」<sup>17)</sup> と。何のことはない。「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する。」という宇野氏の基本命題は、氏自身によってきれいさっぱり否定されているのである。しかしそれも、考えてみれば当然のことと言わなければなるまい。なぜなら、氏は、価値量からの乖離をむしろ常態とする実際の売買価格を表象に浮かべられながら、なおかつ、価値を正確に計量する(尺度する)ものとして貨幣の価値尺度機能を規定されようとしているのであって、そこにもともと方法上無理のあることは明らかだからである<sup>18)</sup>。

ところで、「交換されて見ること」がなされても「それを直ちに価値を計量するものとする

ことは出来ない」ということは、とりもなおさず、「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」のではない、ということにはかならない。かくて宇野氏は言われる。「なお、念のためにいっておくが、『交換されて見る』ということも一度だけでは物指をあててみるということにもあたるとはいえない。」<sup>19)</sup> 「あるいはこの点の方が貨幣の価値尺度機能の特性を一層よくあらわしているものといえるかも知れない。」<sup>20)</sup> と。そして氏は、「貨幣の価値尺度機能の特性」を次のように論定されるのである。すなわち、「貨幣による価値尺度機能は、売買過程を繰返される過程で果たされる」<sup>21)</sup> と。先に見たように、宇野氏は、価格と価値量との「不一致の訂正される過程」に即して貨幣の価値尺度機能を解明すべし、とされていたわけであるが、その成果がこれなのである。

しかし、価格と価値量の「不一致が訂正される過程があつてこそ、貨幣は価値尺度の機能を果たすものとなる」ということ<sup>22)</sup> と、「貨幣による価値尺度機能は、売買過程が繰返される過程で果たされる」ということとは、決して同じ

17) 『著作集』第2巻、岩波書店、1973年、213ページ。

18) 宇野氏は次のようにも言われている。

「一定の価格をもって供給せられる商品は、その商品の需要者たる貨幣所有者によってその価格をもって購買されるとき始めてその価値を社会的に確認されることになる。しかもそれは売れなければ価格を下げ、売れば価格を上げるという関係を通して行われる。事実、商品の価値は単に1回の売買によって社会的に確認されうものではないのである。」(同前、25ページ。傍点一引用者)

しかし、「一定の価格をもって供給せられる商品は、その商品の需要者たる貨幣所有者によってその価格をもって購買されたからといって、その価値を確認されるわけではない。氏が「事実、商品の価値は単に1回の売買によって社会的に確認されうものではない」と言われるのは、単に回数の問題ではなく、その売買価格が価値に一致しているとは限らないからにはほかならないのであって、かかる氏の見地からすれば、いかに「売れなければ価格を下げ、売れば価格を上げるという関係を通し」たところで、価格が価値に一致しない限りは、価値は相変らず確認されていないとするほかないはずである。購買によって「社会的に確認されう」のは、ただ価格そのものだけなのである。

なお、上の点とも関わって、いわゆる「宇野派」内部で価値尺度論争が生じた。この論争については、以下の文献で整理・紹介がなされている。

鎌倉孝夫「価値尺度の規定」(宇野弘蔵編『資本論研究 I』筑摩書房、1967年、所収)

山口重克「貨幣・資本」(同氏他編『資本論研究入門』東京大学出版会、1976年、所収)

桜井毅「価値尺度——商品の価値を尺度するとはどういうことか——」(佐藤金三郎他編『資本論を学ぶ I』有斐閣、1977年、所収)

永谷清「価値尺度論の混乱」(『経済学批判』第4号、社会評論社、1978年5月、所収)

降旗節雄「価値尺度概念の特殊性」(同氏編『宇野理論の現段階 1』社会評論社、1979年、所収)

19) 『著作集』第4巻、341ページ。

20) 同前、342ページ。

21) 同前、353ページ。

22) より具体的には次のように表現されている。「価格の如何によって変動しうる需要があり、さらにまた一定の価格による需要に対応して供給の変動があつてこそ、貨幣は価値を尺度しうるものとなるのである。」(同前、58ページ。)

ではない。前述のように宇野氏は、実際の売買価格を念頭におかれつつ、価値を正確に尺度するものとして貨幣の価値尺度機能を把握しようとされるわけであるから、そうした氏の見地からは、まさしく、価格と価値量との「不一致が訂正される過程があってこそ、貨幣は価値尺度の機能を果たすものとなる」。けれども、氏の所説に照らしても、「貨幣による価値尺度機能は、売買過程が繰返される過程で果たされる」のではない。氏自身「個々の場合には、価値を離れた価格で売買されても、それが繰返される売買過程を通して訂正される」<sup>23)</sup>と言われているように、「売買過程が繰返される過程で」は、「訂正」が完了するまでは「価値を離れた価格で売買される」のであって、その間は、「もちろん価値から背離した価格を実現する貨幣を、それだけでただちに価値尺度機能を果たしたとはいえない」<sup>24)</sup>し、「交換されて見ることも」「物指をあてて見るということ」にあたるとは依然として言えないのである。

かくして、「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」のではない、ということは明らかである。しかもそれは、単なる比喩の適否の問題ではない。宇野氏は、「一般に、価値尺度としての貨幣の機能は、商品がその価値を価格として表現することにあるとせられている。『資本論』も大体そうしている。従来、私もそれにしたがって来たのであるが、それでは価値の尺度としての特殊な性格が把握出来ないように考えられ

る。』<sup>25)</sup>と言われ、その「価値の尺度としての特殊な性格」をば、「物指をあてて見るということが、商品では交換されて見ることなのである」という点に見出されたのであった。そしてかかる観点から、氏は、「貨幣は、まず商品の価値を一定量の金価格として実現することによって価値尺度として機能する」という根本命題を立てられたのであった。然るに、貨幣が「商品の価値を一定量の金価格として実現」したからといって、「それを直ちに価値を計量するものとすることは出来ない」し、貨幣による価格の実現をもって「直ちに貨幣が価値の尺度として機能するとはなし得ない」、ということが明白となったのである。それはとりもなおさず、マルクスの「価値尺度」論に向けられた宇野氏の批判が、そのまま氏自身の価値尺度論に向かって跳ね返ってきたということにほかならない。なぜそんなことになったのか？

ここで、先に挙げた②の問題を取り上げなければならない。その問題とは、「商品が価格を与えられたからといって、それを直ちに価値を計量するものとすることは出来ない」とか、「商品が貨幣形態をとることをもって直ちに貨幣が価値の尺度として機能するとはなし得ない」とかと宇野氏が言われる場合、では、そこでは貨幣はどんな働きをしているのか、という問題である。それはまた、宇野氏が「現にこの価値尺度論についても、私の『資本論』の所説に対する理解は、久留間さんのいうように『価値の価格としての表示は、貨幣としての金の媒介によってはじめて可能なのであり、この媒介的な機能において、貨幣金は価値の尺度なのである』(①44頁)<sup>26)</sup>というのを基本的なるものとし、この表示だけでは、その尺度機能として不十分だというのである。」<sup>27)</sup>と言われるその「基本的なるもの」を、氏はどこまでつめて理解されているか、という問題でもある。

例えば、宇野氏はこう言われている。「商品

23) 同前、353ページ。

24) 「しかし」と宇野氏は言われる。「しかしそういう背離した価格の実現は、価値への一致への動機となるわけで、その点では価値尺度の機能の一要因となる。」(『著作集』第2巻、213ページ)と。もし貨幣の価値尺度機能が価格を価値に一致させるという点にあるならば、あるいは「そうした背離した価格の実現」も、「価値への一致への動機となる」ものとして「価値尺度の機能の一要因」となるのかもしれない。しかし、もちろん、価格を価値に一致させるなどということは、直接には何ら貨幣自体の機能ではありえないのである。

25) 『著作集』第1巻、45ページ。

26) 久留間、前掲書、178ページ。

27) 『著作集』第4巻、334ページ。

価値の貨幣形態、いいかえれば価格<sup>28)</sup>は、いわばなおその商品所有者の私的な、主観的評価にすぎない。」<sup>28)</sup>と。この場合、「評価」というのは、それに続く文章の脈絡からも明らかなように、「金による価値の評価」のことである。そこで宇野氏に従って、商品所有者が自分の商品の価値を金で私的・主観的に評価したものが「商品価値の貨幣形態、いいかえれば価格」だとすると、商品所有者がそうして価格をつける際に、金が「価値を評価するための尺度」とされ、「価値を表現するための材料」とされている、ということとは否定すべくもないであろう。とすると、「商品が貨幣形態をとることをもって、直ちに貨幣が価値の尺度として機能するものと」なし得るようにも見えるのであるが、すでに見たように宇野氏は、「なし得ないのである」と言われる。なぜなら、「商品が価格を与えられたからといって、〔それはまだ「価値の評価」にすぎないのだから、〕それを直ちに価値を計量するものとするとは出来ない」からである。だが、「評価」と「計量」とは、どこがどう違うと言われるのであろうか？

宇野氏も言われるように、「もともと商品は、マルクスにあっては、いずれもその生産に社会的に必要とせられる労働の対象化した価値物として価値形態をも与えられるのであって、等価物は直接にその価値によって相対的価値形態にある商品の価値を測定し、表示するかの如くに扱われるのである。」<sup>29)</sup>マルクスがなぜそうしているのかは後で見ることにするが、とにかくマルクスは、初めから、価値関係を結んでいる両方の商品に「ちょうど同じ量の価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提」(K.I, S. 67. 傍点一引用者)しているのである。これに対して宇野氏は、商品所有者が実際の商品交換に際して自分の商品に何かの商品を等置する場合、彼は何

を意図しているか、というふうに問題を立てられる<sup>30)</sup>。

氏はこう言われるのである。すなわち、商品所有者が自分の商品に何かの商品を等置する行為は、「一商品の所有者が、己れの欲する商品の一定量に対してならば、これこれの量の、その商品を引渡してもよいという意志表示をなすもの」<sup>31)</sup>である、と。たしかに、実際の商品交換を思い浮かべるなら、リンネルの所有者が例えば20エレのリンネルに例えば1着の上衣を等置して、20エレのリンネル＝1着の上衣、とするということは、彼が1着の上衣と交換になら20エレのリンネルを「引渡してもよいという意志表示をなすもの」であること、疑いない。しかしその時、彼は20エレのリンネルの価値を表現しようと意図しているのであろうか？ 問題はそこなのである。

宇野氏は言われる。「リンネルの価値の表現は、簡単なる価値形態では例えばリンネルの所有者が上衣に対してなすものとして理解するより外はないのである。」<sup>32)</sup>と。そこで氏に従って、リンネルの所有者が20エレのリンネルの価値を表現すべく、その20エレのリンネルに例えば2オンスの金を等置するものとしよう。すると、この2オンスの金は20エレのリンネルの価値を正しく表現するか？ 実際には必ずしもそうではないであろう。だが、リンネルの所有者は価値を表現するためにそうしているのに、なぜ価値を正しく表現しえないのか？ 宇野氏は言われる。「物の重さや長さでもあれば、秤や物指をもってすればよいわけであるが、商品の価値は貨幣で表現されたからといってもなおはかられたとはいえない。実は秤にかけないで重さを表現するのに相当する。」<sup>33)</sup>と。ここには

30) 宇野氏の価値形態論については、周知のように久留間 鮎造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、において詳細に批判がなされている。参照されたい。

31) 『著作集』第9巻、180ページ。

32) 『著作集』第3巻、岩波書店、1973年、476-477ページ。

33) 同前、474ページ。

28) 同前、55ページ。

29) 『著作集』第9巻、岩波書店、1974年、196ページ。



また前出の「評価」ということの意味が語られているわけであるが、こうして言われていることは、リンネルの所有者が20エレのリンネルに2オンスの金を等置するのは目分量でのことだ、ということにほかならない。だが、リンネルの所有者は自分の大切な商品の価値を表現するのに、なぜしっかりと計量しないで目分量に頼るのか？ おそらく、価値の大きさはそのものとしては商品所有者たちのとらえうるところではないからであろう。ならば、なぜ商品所有者たちは、そのとらええない価値の大きさをわざわざ意識し、かつまたそれを表現しなければならないのか？

「生産物交換者たちがまず第一に実際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。」(K. I, S. 89.) だから実際の交換に際して彼らが表現しなければならないのは、そしてまた彼らが実際に表現するのは、直接には自分たちの商品の交換価値なのであって、価値ではないのである。実際の交換に際して、リンネルの所有者が20エレのリンネルに1着の上着を等置するとすれば、それは20エレのリンネルの交換価値を1着の上着で表現しているわけであるから、そこになされていることは、まさしく宇野氏の言われるように、1着の上着に対してなら20エレのリンネルを「引渡してもよいという意志表示」にほかならない。しかしその際、リンネルの所有者は、20エレのリンネルの価値を表現しようなどとは、露ほども意図していないのである。

元来、諸商品の価値対象性は商品所有者たちの日常的な意識に上のような性質のものではないのであって、マルクスの言う如く「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。」(ebenda.)ところが宇野氏は、価値概念を交換価値概念から明確に区別することを避けられる<sup>34)</sup>

ために、自ら交換価値の大きさの表現と価値の大きさの表現とを混同されてしまうのである。一方では、氏は、具体的な実際の売買過程（または実際の商品交換）という御自分の思い浮かべられている表象をマルクスに押し付けられるから、マルクスの価値形態論や価値尺度論が、商品所有者たちの意図や行動の背後に隠れている「秘密」（「無原則性の盲目的に作用する平均法則」）を問題にする至極抽象的なものだということを、少しも理解されえない。他方ではまた、氏は、実際の売買価格は直接にはただ交換価値の大きさを表現するだけであり<sup>35)</sup>、そこでは貨幣はただ交換価値の尺度として機能しているだけであるのに、実際の売買価格が直接に価値の大きさを（「秤にかけないで重さを表現するのに相当する」仕方）で表現するものであるかの如くに誤解され、そこに貨幣の価値尺度機能の直接的な作用を探し求められる。ないものがあるものとして規定しようとされるわけであるから、氏の価値尺度論が「もともと価値尺度論と呼べるべきものではなく、別の名称を与えらるべきもの」<sup>36)</sup>とならざるをえないのも、けだし当然のことだったのである。

### 〔Ⅲ〕マルクス「価値尺度」論の方法

宇野弘蔵氏のマルクス批判についての以上の検討が示していることは、マルクスの価値尺度論を理解するためには、その抽象的な性格をしっかりと見据えておかなければならない、ということである。それはまた、『資本論』第1部第1篇の課題と方法をよく呑み込んでおくことが必要だ、ということでもある。そこで今度は、マルクス「価値尺度」論の方法を確かめてみることにしよう。

周知のようにマルクスは、『資本論』の課題と方法について次のように述べている。

「生産関係の物化の叙述や生産当事者たち

35) 高田太久吉「貨幣の価値尺度機能」(『大月経済学辞典』大月書店、1979年、所収) 参照。

36) 久留間『貨幣論』225-226ページ。

34) 下平尾、前掲書、50-51ページ参照。

にたいする生産関係の独立化の叙述では、われわれは、もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らを無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方には立ち入らない。なぜ立ち入らないかと言えば、競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義的生産様式の内的編成を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよいのだからである。」(K. III, S. 839.)

ここで重要なのは、「資本主義的生産様式の内的編成を、いわばその理想的平均において示す」と言われていることの実際の内容である。前出のようにマルクスは、資本主義的生産様式を「そこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてだけ貫かれうるような生産様式」ととらえているのであって、そうした観点からは、「理想的平均における資本主義的生産様式の内的編成」とは「原則」＝「自然法則」が貫徹されている姿にほかならない。だから、「資本主義的生産様式の内的編成を、いわばその理想的平均において示す」というのは、「『自然法則』が貫徹されている姿を示す」ということにほかならないのである。この点は、『資本論』第1部第1篇のマルクスの叙述を誤りなく理解するために、特に銘記されていなければならない。

では、「自然法則」とは何か？ マルクスは、1868年7月11日付のクーゲルマン宛書簡の中で、次のように述べている。

「どの国民も、もし1年とは言わず数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう、ということは子供でもわかることです。また、いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということも、やはり子供でもわかることです。このような、一定

の割合での社会的労働の分割の必要は、決して社会的生産の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象様式を変えるだけだ、ということは自明です。自然法則はけっして廃棄されうるものではありません。歴史的に違ういろいろな状態のもとで変化しうるものは、ただかの諸法則が貫かれる形態だけです。そして、社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとでこのような一定の割合での労働の分割が実現される形態、これがまさにこれらの生産物の交換価値なのです。」<sup>37)</sup>

見られるように、「自然法則」とは「一定の割合での社会的労働の分割の必要」ということにほかならない。だから「『自然法則』が貫徹されている姿を示す」ということは、単純商品流通のレベルで言えば、「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が」「それらの社会的に均衡のとれた限度に還元」(K. I, S. 89) されている姿を示す、ということにほかならないのである。その場合、もちろん、「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される」商品経済においては、「自然法則」は、労働生産物が商品という形態を受け取り、その商品の生産に社会的に必要とされる労働時間が価値という形態を受け取り、さらにその価値はまた貨幣を尺度として計量され、表現されることによって価格という形態を受け取る<sup>38)</sup>ばかりでなく、「社会的労働の関連」が貨幣を媒介とする諸商品の「価値どお

37) マルクス＝エンゲルス（岡崎次郎訳）『資本論書簡』（2）、大月書店、1971年、162-163ページ。傍点＝マルクス。

38) マルクスは1858年4月2日付エンゲルス宛書簡の中で、当時準備中の彼の経済学の著作のプランを示しているが、その中で「尺度としての貨幣」の観点を次のように記している。

「2 貨幣。……

(a) 尺度としての貨幣。……商品の価値が貨幣に翻訳されたものが商品の価格なのだが、それは暫くはただこのように価値とは単に形態的に区別

りの交換」という形態を受け取る<sup>39)</sup>，というふうにして実現されるほかない。マルクスが『資本論』第1部第1篇で展開しているのは、まさしく「自然法則」のかかる商品経済的实现形態なのである。そこでは、「自然法則」が商品経済的形態で（したがって価値法則として）実現されている姿を示すことが課題なのであるから、当然のこととして「価値どおりの交換または販売」が仮定される。

しかしもちろん、商品論・貨幣論のレベルでマルクスによって論定されている諸法則も、何か「自然法則」からの先験的演繹によって導き出されたというようなものでは全然ない。「市場価格の絶え間ない振動、その上昇と低下は、互いに償い合い、相殺されて、おのずからその内的基準としての平均価格に還元される」（K. I, S. 180）という事実の深く鋭い分析こそが、そうした諸法則の洞察へと導いたのである。マルクスは言っている。「いろいろな生産部面の商品が互いに価値どおりに売られるという仮定が意味していることは、もちろん、ただ、商品の価値が重心となって商品の価格はこの重心をめぐる運動し価格の不断の騰落はこの重心に平均化されるということだけである。」（K. III, S. 187）と。

マルクスも繰り返し強調しているように、「ブルジョア社会の核心は、まさに、アプリオリに〔その本性上〕生産の意識的な社会的な規制が行なわれない、ということにある。理性的なものや自然必然的なものは、ただ、盲目的に

作用する平均として実現されるだけである。」<sup>40)</sup>「生産物交換者たちがまず第一に 実際に関心をもつのは、自分の生産物と引きかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。」彼らにとっては、彼らの生産物は「直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段である」（K. I, S. 100）にすぎない。それだから、実際の売買過程において評価され<sup>41)</sup>、表現されているのは直接にはただ諸商品の交換価値の大きさだけであり、そこでは貨幣は直接にはただ交換価値の尺度として機能しているだけなのであって、実際の売買価格は、直接にはただ諸商品の交換価値の大きさを、諸商品と貨幣との交換割合として表現しているだけなのである。そこでマルクスは言う。「商品の価値量は、社会的労働時間にたいする或る必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表わしている。価値量が価格に転化されるとともに、この必然的な関係は、一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現われる。しかし、この割合では、商品の価値量が表現されうるとともに、また、与えられた事情のもとでその商品が手放される場合の価値量以上または以下も表現されうる。だから、価格と価値量との量的な不一致の可能性、または価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにあるのである。」（ebenda, S. 117. 傍点一引用者）と。

40) 『資本論書簡』（2），163ページ。ただし、前後の関係から文体は変えた。

41) 価値と違って交換価値の大きさは所与のものではない。「商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような〔商品は使用価値であるとともに交換価値である〕という二重物として現われる」（K. I, S. 75. 〔 〕内一引用者）のであり、したがって「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる」（ebenda, S. 50）ほかないのである。だからそれは計量されることを得ず、ただ評価されるだけなのである。

されるものとして現われるだけだ。価値の一般的な法則に従って、そこでは一定量の貨幣はただ一定量の対象化された労働を表わしているだけだ。」（マルクス＝エンゲルス《岡崎次郎訳》『資本論書簡』（1），大月書店，1971年，250ページ。）

無論、現行『資本論』第1部第3章第1節「価値の尺度」の観点も、上記と変わるものではない。マルクスの価値尺度論がかかる抽象レベルのものであること、銘記される必要がある。

39) 「諸商品の 価値どおりの 交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である。」（K. III, S. 197.）

もちろん、交換価値の大きさを評価し、表現するということは、売買当事者たちがそれと意識することなしに価値の大きさを測定し表現しようとしていることにほかならず、それが、価値の大きさを測定し、表現するための唯一妥当な社会的な仕方なのであり<sup>42)</sup>、したがってまた、交換価値の尺度として機能するということが、貨幣が価値の尺度として機能する唯一妥当な社会的な仕方なのである。そうであるからこそ、「私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合〔実際の売買価格〕をつうじて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間〔価値法則〕が、たとえばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規則的な自然法則として強力的に貫かれる」(ebenda, S. 89. [ ] 内一引用者) こともできるのである。かくてマルクスは言う。価格の価値量からの乖離の可能性が現象的な価格形態そのもののうちにあるということは、「この形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、すなわちそこでは原則〔商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則〕<sup>43)</sup> がただ無原則則性〔価格の偶然的な絶えず変動する現象的な運動〕の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである。」と。

## む す び

以上に明らかなように、マルクスの「価値尺度」論を合理的に理解するための鍵は、一方では、『資本論』第1部第3章第1節の論理レベルの抽象性を見失わないことであり、他方では、交換価値の尺度として機能するということが貨幣の価値尺度機能の具体的な在り方なのだということを理解することである。

42) この意味で、実際の売買価格もやはりより具体的な価値の現象形態＝価値形態にほかならない。

43) カール・マルクス(岡崎次郎訳)『直接的生産過程の諸結果』大月書店、1970年、161ページ。

金の価値を尺度として諸商品の価値を計量するという法則は、貨幣の「交換価値」を尺度として諸商品の交換価値を評価するという現象を通してのみ貫かれうる。もちろん、ここに貨幣の「交換価値」と言うのは、「貨幣商品の独自の相対的価値形態」(K. I, S. 110) のことであり、平たく言えば「貨幣の購買力」のことにほかならない<sup>44)</sup>。

なお、以上はあくまでも単純流通を想定しての議論にすぎないが、実際の売買価格は直接には「貨幣の購買力」を尺度として諸商品の交換価値を評価し、表現したものだ、ということは、今日の貨幣的諸現象を解明しようとする際にも、決して忘れてはならないことなのである。

44) 高須賀義博氏は言われる。「市場価格は市場における需給関係を反映して不断に変動する。このばあいの価格形成において商品所有者の意識のなかで働く価値尺度財の価値は、貨幣商品金の内在的価値ではなく、ここでいう貨幣の支配商品価値のほうである。」(同氏著『現代のインフレーション——構造論的接近——』新評論、1981年、33ページ)と。「ここでいう貨幣の支配商品価値」というのは、「自己の商品を貨幣に転化させたのちに、その貨幣でもって購入することのできる商品の価値のことであり、通常『貨幣の購買力』といわれるものを、価値のタームであらわしたもの」(同前、32ページ)であるが、それにしても、「商品所有者の意識のなかで働く」のは、貨幣を媒介として「自分の商品とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか」(K. I, S. 89)ということなのであって、その「他人の生産物」がどれだけの価値を含んでいるかなどということ意識するわけがないのである。実際の売買過程では、「商品所有者の意識のなかで働く価値尺度財」の価値はすでに「交換価値」として現われており、したがって彼が意識するのは、「貨幣の支配商品価値のほう」ではなく、「貨幣の支配商品量」すなわち「貨幣の購買力」のほうだ、と言われなければならない。